歴史発見

毛利数馬は高成の弟ではなかった

古文書を読む会
林　寅喜

佐伯に残る数々の郷土史には、毛利数馬（別名次郎八・高定・高明）は二代高成の弟となっている。ところが、この度数馬の直筆と見られる覚書（下書きと思われる）が発見され、『古文書を読む会』で解読する機会を得た。それは、昭和五十七年池彦の土蔵改修時に、焼却寸前の廃棄物中から取り出し保管していたもので、寛永十一年（一六三四）十一月十四日書き上げた、としている。

これによると、数馬は慶長七年（一六〇二）高政と旧大友の家臣吉田善正の娘との間に佐伯で生まれたが、

一森数馬年三十一に罷成候　摂津守より兄にて御座候へども別腹（妾腹）にて御座候故　上様へは摂津守弟と申上候事

と書いてあり、佐伯藩の系図及び史料等にいう高成の弟ではなく、兄であったという事実が判明した。そこでこの覚書に従い数馬の経歴と関連した主な出来事を併記すると次のようになる。

数馬の経歴

慶長七（一六〇二）佐伯で出生　高政43（満年齢以下同じ）
〃　八（一六〇三）高成出生　高政44
〃　九（一六〇四）西国諸大名人質を出す
〃十八（一六一三）人質となって将軍秀忠に拝謁し、七十人扶持を受ける　数馬11
元和元（一六一五）大坂夏の陣　数馬13
〃　二（一六一六）家康死去74
〃　三（一六一七）鶴屋城炎上　数馬15
〃　六（一六二〇）佐伯へ帰藩18　高成17江戸へ出府
寛永四（一六二七）家老となる25
〃　五（一六二八）高政死去69　二代高成襲封25
〃　七（一六三〇）再び江戸へ出府28
〃　八（一六三一）将軍家光に拝謁29
月に三度の拝謁を仰せ付けらる
〃　九（一六三二）将軍秀忠死去53

高成死去29　　数馬30
森吉安知行二千石を幕府に返上
〃　十（一六三三）三代高直襲封2　　数馬31
〃十七（一六四〇）森吉安死去67　　数馬38
慶安四（一六五一）将軍家光死去47　　数馬49
寛文四（一六六四）高直死去33　四代高重襲封2　　数馬62
延宝八（一六八〇）将軍家綱死去39　　数馬78
天和二（一六八二）高重死去20　五代高久襲封15　　数馬80
内町・船頭町大火
貞享五（一六八八）高久養子高慶の後見として将軍綱吉に拝謁86
同年十二月二十六日死去

『解説』

・寛永九年、二代藩主高成の急死によって三代の跡目相続をめぐり高政の弟森吉安は、数馬は妾腹ながら高成の兄であったこと、及び少年期に七年間も人質として江戸に在住し、幕府の禄を受け将軍家の覚も目出度く、年齢30、人格（家老）共に適任であるとして、推挙したのは賢明な策であったと思う。

・これに対し、江戸詰家老並河杢之助が擁立した市三郎は、年僅か二歳の幼児ながら高成の直系男子ということで、筋目を通したその申し出に幕閣も異論はなかったようである。

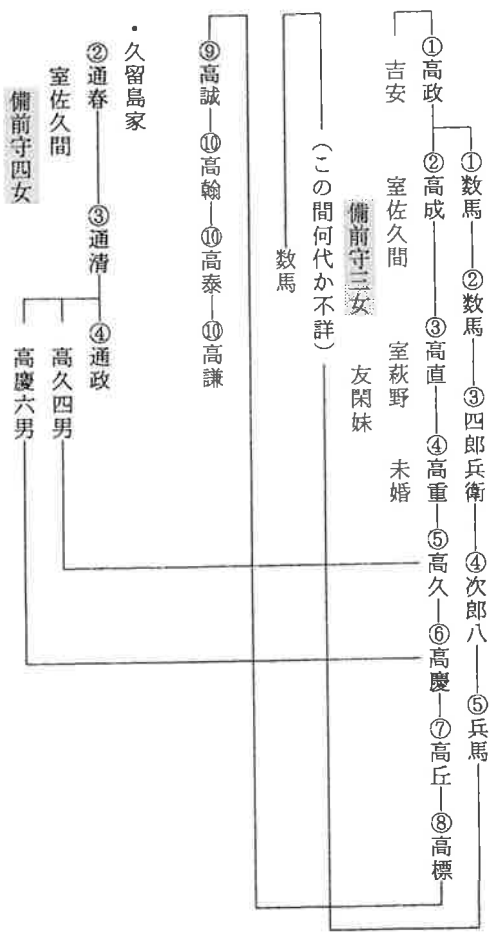
・一方、佐伯藩では市三郎が成人するまでの十数年間、藩政は家老職が執行したと考える。そこで、もしその間に内紛を起こして公儀に聞こえれば藩政不行届として、また、市三郎が成人を待たずに夭折した場合は武家諸法度の無嗣除封により、何れとも改易は免れないものと肝に銘じていた筈で、二万石は安堵されたものの薄氷を踏む思いの日々ではなかったろうか。

・曲論で恐縮だがこれとは逆に、もし吉安の意見が入れられて数馬が三代を相続していたとすれば、或いは五代以降に久留島家から養子を迎えることもなく、毛利の系統は幕末まで続いていたかも知れない。

・晩年は毛利兵橘と名乗っていた（温故知新録諸雑記）が、その時期は何時頃からか定かでない。

・毛利の系統を継いだ唯一人の生き残りとして、久留島家から迎えた高久・高慶と、バトンタッチを見届けた最後の人であった。

佐伯藩と森藩の関係



（温故知新録・大分歴史事典より）

右の系図を見れば毛利高成と久留島通春は、正室同士が姉妹ということから義兄弟であったことになる。

したがって、祖父の縁続きということで、高久は高重の跡五代藩主として迎え入れられたのであろう。

こうした家続きから、高重が僅か二歳で四代を襲封した寛文四年（一六六四）以降、久留島三代通清（40歳前後）が藩政に介入し助言していた。と温故知新録の諸旧記（十五年度解読・文化講座資料）に記されている。

一方、数馬の系統は毛利の一門として幕末（十八年度解読・同御用日記）まで続いていたことが分かった。